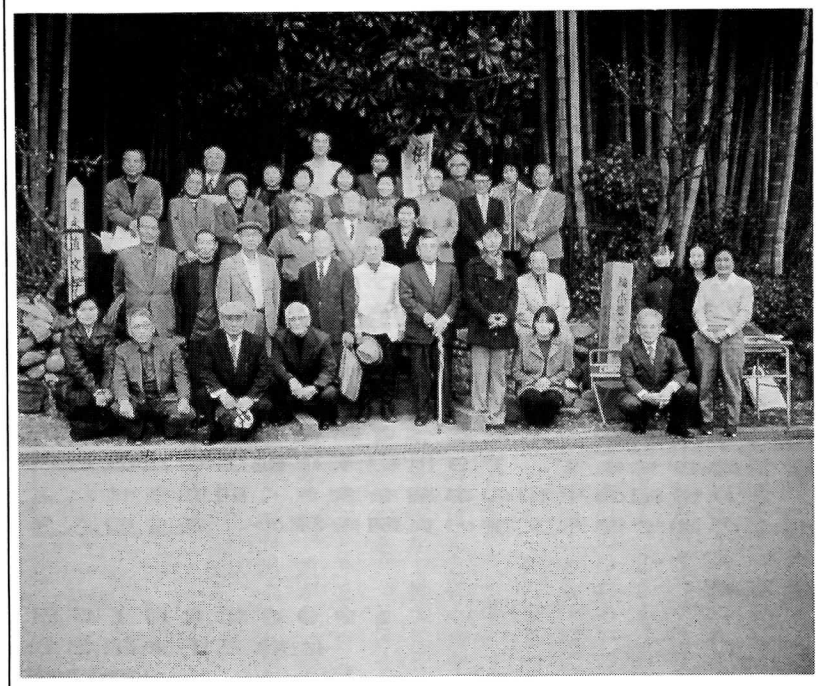
熊本・徳永直の会会報
第３７号



第２１回孟宗忌は晴天に恵まれた

徳永直生誕百年祭だ！

一八九九年生まれの徳永直である。宮沢賢治の生誕百年祭（一九九六年）は、花巻温泉の帝王出資で大大的であった。賢治と岩手あるいは花巻というのは日本人の多くが知っている。徳永直が熊本だとは知らない日本人が多い。なぜか。賢治文学と直文学の質の違いもあろう。だが賢治文学は圧倒的多数の読者をもっている。本屋に行けばすぐ手に入れることができる。教科書にも出ている。作品が実に簡単に読めるのである。では直文学はどうだ。読みたくても本が手に入らない。本が無ければ読むことはできない。私は直文学について、随分多くの機会に喋ってきた。その都度その本はどこにありますかという声が出る。そう簡単に手に入るところはないのである。

生誕百年を機に、直文学の本作りを始めねばならない。出版は何も東京に頼らなくてもいい。今まで東京は何もしなかった。まずは熊本で出していけばいいのだ。熊本でどんどん出せば東京はすぐ真似る。一体に熊本出身の作家は、徳富兄弟を除けば、本にするのが下手のようである。来年生誕百年を迎える熊本の作家には蔵原伸二郎がいる。「阿部一族」にも名が出る先祖をもつ丸山薫もいる。蔵原も丸山も作品を読むのに苦労する。ちなみに来年生誕百年の作家には、宮本百合子、川端康成、石川淳、山手樹一郎、川口松太郎らがいる。

何はともあれ、熊本はもっと徳永直を大切にせねばならぬ。売り出さねばならぬ。全国唯一の徳永直文学碑はある。熊本で彼の本を出せないはずがない。出版に必要な募金運動を始めようではないか。生誕百年を実のあるものにするためにも。

メッセージ

徳永直没後４０周年にあたり、徳永の北の故郷―宮城県登米の地から連帯の挨拶を送ります。

昨今の金融破綻で、日本の資本主義の「暴走ぶり」と労働者への冷たい仕打ちを見せつけました。官吏や「闇屋」との癒着したこのシステムは、キーボード操作一つで巨額の利益を得る「魔力」があります。

「魔力」を操る者たちは、「太陽のない街」の光を遮っていたものたちの子孫でもありました。徳永だったら、これらの「魔人」たちにどのような怒りのペンを振るったでしょうか。

戦争の「闇」で「光」を待ち続けた徳永の日々は、私たちに、２０世紀末の「闇」が、来たるべき新世紀の「光」の前兆であることを予感させます。１９世紀末に誕生した直と三千夫の二人が、２０世紀の平和の事業を大きく前進させたように、登米と熊本の地で徳永文学の真髄を深め、多くの人々に広めていきましょう。

第２１回孟宗忌万歳！

１９９８年２月１５日

佐藤三千夫記念会

宮城県登米町

金しゃんの子

米原尋子

「ああたは、どこん子な」

近所の人からそう尋ねられるたびに、私は消え入りそうになった。

「そうな、ああたは金しゃんの子な」

ほう、というような笑顔と共に返ってくるのが「金しゃんの子」。小学校も上級生になると「私は、金しゃんの子です」とおどけてみせるようになったが、文学少女としては「金しゃん」の、どことなくひょうきんで品のない語感にいつも屈折していた。

父の名は「米原金蔵」、つまり米の原に金の蔵である。

「お父さんは名前負けして。お父さんと結婚したのは一生の不作、不作」

父の名前のことになるとかならず母は冗談めかせながら「不作、不作」を繰り返した。無口な父はそんな時、いつもにこにこして「ンにゃぁ、わしは今でもお母さんと結婚してよかったと思っとるよ」と言うのであった。

父は明治の人らしくわが子の命名に関しては字画を調べたりして、その一生への思いを託したらしい。私が名前の由来を尋ねた時の言葉が忘れなれない。

「おまの〝尋〟はな、昔、海の海里ば量る時に腕の長さで〝一尋、二尋〟って量りよったつたい。海のように心のひろーい、物事にこだわらん子に育ってほしいと思ってな」

父は海軍の人であった。そして〝尋〟をもらった私は、つまづきや失敗を繰り返すたびに「私も名前負けしてる」と思うのだ。

大野たつめ様近況

中村青史

大野たつめさん（徳永直の末妹）が、孟宗忌に顔を見せられなくなって久しい。脳血栓で倒れられたのだが、随分回復されている。先日、新築の須屋の御自宅に見舞いに行った。耳は遠いが、左半身も動かしておられたし、見た目には大変お元気そうであった。以前から大変信心深い方であったが、医者よりも仏さまが治して下さるとのこと。兄は無神論者だったから、迷信だと笑うかも知れないがともおっしゃる。しかしこれまで生かされてきたのは、やはり仏さまの力ですと。この精神力、なるほどと感心する。仏さまにお祈りするのは、私のことばかりではありません。直兄のつれあいのおばあさん、そうそうヨシさんです、そのヨシさんのことも一緒にお祈りするとです。あの川に洗濯に行って、落っこちて死んなさった方です。『彼岸』という作品を読んどられるのだなあと、思わず握手したくなる。トシオ夫人についても、あの方はほんとに心のやさしか人でした、と。来年の孟宗忌は、徳永直生誕百年で盛大にやりますから、それまでには外を歩けるようになって下さい。と言うと、来年は出ますばい、とおっしゃる。私と二十違うとりますけん、生きとるなら百歳ですたいな、と感慨深げであった。頭がしっかりしとられるので、来年の孟宗忌には、きっとおいでが出来ると信じてお別れした。

徳永直生誕百年祭　予告

と　き・一九九九年二月一三日（土）

ところ・熊本国際交流会館大ホール

いしぶみ

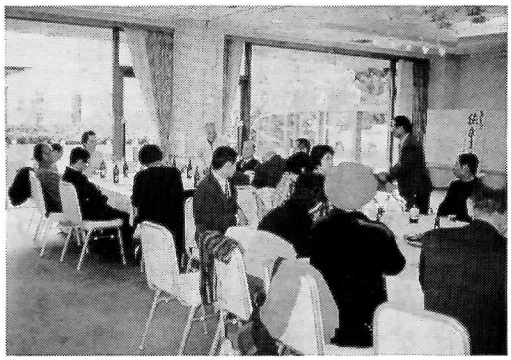
大橋三千代

立田の山に孟宗の竹

木にあらず
草にあらず
竹にあり
その地下茎は
地中をかいくぐり
大地の脈動を
さぐりあてる

竹のある風景のなかで
黒御影に刻まれた
労働の魂
強く
熱く

竹の笹（は）の
緑（あお）いささめきに
やぶ椿が
一つ、落ちた
赤く



第２１回孟宗忌　偲ぶ会風景

事務局だより

▼雑誌『民主文学』（一九九八年三月号）が「徳永直没後四十年」の特集号を出した。四人の執筆者で、『太陽のない街』とプロレタリア文学』松澤信祐、『「光をかかぐる人々」について』浦西和彦、『「妻よねむれ」と「日本人サトウ」』津田孝、『「静かな山々」を読む』宮寺清一である。中でも宮寺氏の論考には小沢清氏はじめ、徳永周辺のあまり知られていない人物が出ていて興味深い。

▼来年は徳永直生誕百年である。いろんな雑誌が徳永直特集をやることを希望したい。

▼会報38号は、生誕百年特集号としたい。今から原稿を用意しておいてもらいたい。中村研究室最後の仕事となるだろう。第30号（22ページ）以上のものを作りたい。

▼偲ぶ会は今回も熊大内くすの木会館で開いた。教育学部校舎が工事中だったためである。「ここがよかですバイ」との声もあるが、久しぶりに顔を見せた鈴木正道さんは「徳永直はテントでメザシがよかった。こんな立派な場所でやるのは堕落じゃないか」と言う。来年はもっといい場所、国際交流会館でやることに内定している。スーパー堕落で事務局担当を引退することになりそうだ。

（中村）

〒860-0862 熊本市黒髪二－四〇－一　熊本大学教育学部中村研究室
ＴＥＬ（〇九六）三四二－二五八四
振替〇一九四〇－二－一一四九八番　熊本・徳永直の会

印刷所　㈱昭和印刷　三四四－五二五一・三四三－三八八六